

「鹿島の逸話」

〓 鹿島神宮第六十六代大宮司、鹿島則孝著、櫻齋隨筆より抜萃〓

(鹿島古文書読書会編)

「目次」

- 一、 はしがき
- 二、 櫻山
- 三、 筆者鹿島則孝の住居の桜
- 四、 鹿島の気候
- 五、 明治初期の鹿島のバブル
- 六、 江戸末期の鹿島の異変
- 七、 角折村の昔話
- 八、 太田村砂山の口碑
- 九、 明治期の鹿島の不況
- 十、 江戸末期の宮中村の出火

一、はし加喜端書

昔むかしよしだの里さとに、

何某なにがしの、

日暮ひぐらし硯すずりにむかいにし、

む可むかしよし多乃たのさ登尔とる、奈尔な可かし能ね、非ひくらし春はるぐ里さとにむ可むかひにし、

その旧事ふるごとに習ならうふ、

歳としもはあらねども、

雪ゆきの朝あした、

そ能そねふることにならふ、登とるしもハ阿あら祢ねども、ゆ支しのあし多た、

雨あめの夕边ゆうべの、

徒然つれづれなるままに、

幼おきなき頃ころ、

他人ひとに、

阿免あめん乃の由よしふべの、つれ／＼奈なるまゝに、於おさ那な起おこころ、非ひとに

聴きき得えたること、

目まの当あたり見みたりしこと、

将はた、去いにし世よの文ふみ、

起おこきえ多たるこ登とる、ま能まね阿あ多たりミみた里さとし古ふる登とる、は多た、以も尔にし与よ乃のふミ、

今いまの世よの、

新聞紙しんぶんしなどよりも、

世よにめずらしく、

思おもうは、

いま能いまねよの しんぶむし那などよりも 与よ尔にめづらしく おもふハ

事こと毎ごとに、

書かき記ししたりしを、

年経としつまゝに、

早はやや、

こ登とるごと尔に 可か起おこ志しるし多たりし越こ 登とるし多た川がわまゝに 者ものや

幾いく巻まきにかなりぬ。

さあれ他人ひとに、

示しめさんとの為ためにも、

いくま起おこ尔に可かなりぬ 佐すけハれ非ひと尔に しめ左ひだりむ登とる乃のため尔も

あらねば月々つきづきも、

乱みだりりがましけれど、

書かき改あらためむも、

あらねばつ起おこ／＼も ミ多たりがましけれ登とる 可か起おこあら多ためむも

扱さて物憂ものうくて、

元もとの儘ままに為なし置おきつ、

又また、東あずまの都みやこの

さてものうく天あま もとのまゝに奈なしおき津つ ま多た阿あづま能ねミやこの

事ことはしも、 己おのれれ、

生立おいたちし所ところなれば、

幕府ばくふの様子さまより

古ふるとはしも 於おのれ 於お飛と多たちし登とるころ奈なれバ ばくふのさまより

始はじめて、

事こと々に落おち丁ちやうなく、

書かき記しぬ。

あわれ、 己おのが

者ものじめて 古ふると／＼におち奈なく 可か起おこ志しるしぬ あは連つら、おのが

家いえの系統ながれく汲ひみなむ人ひとたちの、

見みぬ世よを偲しのぶ縁よすががとならば

いへの奈可れ具ミなむひと多ちの　ミぬ与越しのぶよ春可登奈らば
老いが身の、御祝いにこそ。

於い可ミ能　御ひはひ尔こ楚

櫻花のかをるまゝ能、も登尔、
とに(下に)

明治二十年四月十五日

七十五、叟　鹿島則孝

二、桜山さくらやま筆者ひつしやの住居すまい

己れ幼おきなき頃ころより、

桜さくらを愛めずる癖くせなんありけり。

されば

於のれ於さ奈喜古ろ与り、桜越免つる癖なむあり介里。左連は

如何いかで土地とち広ひろろかに、

桜多さくらき住居すまいを

求もとめばやと、

以可いて土地とち飛ひろゝ可かに　左くら於ほき寿しゆま為越　も登のぼめ者ものやと

明あけ暮くれれに思おもい居いりしに、

凶はからずも、

鹿島かしまに下くだる事こととはなりぬ。

阿あけくれ尔思えんひ居いりしに　者可ものら須すも、鹿島かしま尔下くだることゝは奈なりぬ

さても此この屋敷やしきは、

昔むかし佐竹さたけ氏の、

砦とりでにて在ありしを、遠とほつ祖先おやの、

佐天さも此こやしきは　む可むし佐竹さたけ氏の、砦とりで尔亭えん阿ありし越　遠とほつ祖おや乃

則興のりおきの君きみの、

慶長けいちょう元年げんねん三月さんがつの二日ふつかと言いうに、

湖辺みずべの里さとより、此この、
(北浦北浦辺り)

則興のりおきの君きみの　慶長けいちょう元年げんねん三月さんがつの二日ふつかといふ尔　湖辺みずべの里さとより、古この

桜山さくらやまの地ちに、

移うつられたりと、

古ふるき文ふみに見みえたり。

さればその頃ころより、

桜山さくらやま乃地のち尔、移うつられた里さとと、古ふるきふみ尔見江みえ多たり。佐禮さらいハ其頃ころより、

桜山さくらやまの縁えんありにしを、

思おもえば、

猶なほ昔むかしより、

さくらの数多あまた

左くら山の縁えんあり尔しを　於もへハ　猶なほむ可むし与里　桜の阿満多

ありしならむ。

その名残なごりと、

しも見みゆる、

桜さくらの多おほく残のこれり。

ありし奈らむ。　そ能奈なごり登のぼ　しもミ由る　桜の於おく残のこ連り

それのみにあらで、土地もいと、 広ろかにて、五千三百坪、

楚れ乃ミにハあらで 土地もい登 ひろく可にて 五千三百坪、

余りぞ有りける。これにしも、 我が幼きよりの、

阿まりぞあり介る 古れ尔しも 王ガ於さ奈きより能

望果たりぬ。こは、 これ又々、 花神の恵み給える

望ハた里ぬ 古者 此れま多く 花神の恵ミ給へる

ならむと、 嬉しきことにこそ。

那らむ登 宇れし喜ことに古そ。

(後略)

三、筆者の住居の桜

王可、隠家の園に、 登きしくに 花さく桜三種阿り介里。

そ能一は、花も常乃山桜よりも、 大い奈る一重尔てうす 紅の色をふくみ、

猶徒不めるほとハ、紅尔して莖者奈可くなんあり介る。

以万一者、こ毛一重に天、 色ハ白花の、津不免るほとハ、 心保そ支まで、

具れなる越婦くミ多るが、く起者短くて梅奈どに似つ可ハし。

阿登ひと川ハ、世に彼岸佐くらと可いふにて、 紅いと婦可支、八へ 乃花奈里。

こ能三く佐乃花は、秋冬も知らぬにや。 常磐尔、王可葉生出天、 いつもはる

奈ると以はむ左满尔、実子さえ常尔結ひ天、 花者秋分の季節より春分の頃

まで枝に絶ることなく、げ尔、 与尔毛免づらしき 桜那里介里。

そ能さ満ハし毛、秋能隈奈支月可希尔、 おきそふ露もゑむにやさしく、白作

出、紅葉春る同じ梢乃そのうちよ里、 志ろく咲出多るハ、春秋のな可めを

飛と起に志めし、落葉するほどハ、 世にかへり佐支と可いふ、は可奈

きたくひに者、尔もやら春登起めきいで、 又多志川介支日可希尔ハ、こと更尔

花も於お不おく、若葉もつや／＼志つく生く出はて、ままだ来来はるのかようか、
宇多可者うたがわれ、雪降りのふりはれし夜半よわはハ、月つきに映うつろふ可うげの、もも能のすさまじくはあ
れど、月雪花つきゆきはなの三川みつつの奈なが可め免めを、ああつめ多たるもおもしろき。

ききささららぎ、ややよいいのころは
きき佐さらら起ぎ、弥生やよひ乃の頃ころハ、わわけてももい者者須須。まま多多、五五月月乃の初はじめめつ可か多多、志しげり
ああううずずええのすずずししききかかげ、ななおおささき
阿あふふ梢梢能能、涼涼しし支支かか希希に猶猶咲咲のこれれるるハ、青あお地じの錦錦錦、玉たま越越つつめめるる心こちちぞ
する。折おりから、ほほととぎぎ春しの志志志能能び音に奈なき由具具那那と、奈な尔尔ここゝ呂呂せせむ。

左されれバ、加かくく登登支支じじくくに佐さ介介るるをを見みつつ、たたのし支支月月日日越越おおく累累、花は好好のひ
ががぐぐせせああるるおおいいががみみ、ややままびびととのす
可かくくせせ阿あるる老老可可身身、やや満満人人農農春春むむといいふふ奈な累累、よよももぎぎ可可島島尔尔毛毛、満まささるる良良む
と、おおもも不不へへ亭亭、ううれれしし喜喜ままゝゝに、かか具具ものの端端に、書かききつつ介介おおくくにに奈なむむ。

四、鹿島の気候、

東京とうきょうと鹿島かしまの気候きこうをを試こるるに、是これまでまいいとししふふゆゆ、寒かん氣きハ、東とう京きょうの方方ほう強つよく、夫それ由ゆゑえに
梅ばい花か者は、二に月げ下じ旬ゆん奈なららででハ真ま盛まりり尔にらら須す。其その割わり尔にしてしてハ桜は花くら者は、四し月げ初じ旬ゆん、
開かい花か須す。

本ほん年ねんも、則のりりややす、書しよ状じょう尔に、四じ月げ廿に二に日にち、飛あすかやま山やまへゆききししにに桜さくら花はハ、散ちり多たり
と云いう。本ほん村そん者はここ連れんにに反はんし、梅ばい花かハ毎まい年とし十二じふ二に月げ初じ旬ゆん与よりり開ひらき、一いち月げ下じ旬ゆん、二に月げ初じ旬ゆん、梅ばい花かにに遅ち速すく有あるる由ゆゑえ、をを真ま盛まととす。

又また桜さくら花は者は、其その割わり尔にハはひひららかかず、本ほん年ねん奈などどハ、四し月げ廿に二に日にちににハ、山やま桜さくらもも八や重えん桜さくらもも塩しお竈がま
桜さくら、一いち同どうにに真ま盛ま尔にてて咲さくくもも後おくく、散ちりもも初はじじめめず、ほほどどななり也なり。梅うめ、桜さくらの開開かい花か、
いいとと不い審ぶし。

これこれれハ本ほん村そん者は、海かい岸がん由ゆゑえ、冬ふゆよりより新しん春しゅんへかけだんきにて天てん。二に月げ古ころろより、
東ひが風かぜ吹ふききつつぐぐとと、良うししととちち、異いつつ方ほうにに、海うみああるる由ゆゑえ、沖おききよりより吹ふきき来かるる風かぜ、
甚はななはは寒さむく、人ひともも草く木さきもも凌しのぎぎ兼かねるる程ほど也なり。

其そのたためめししは、衣い服ふくおおよよ、夜や具ぐ奈などどもも四し月げ頃ころままででハ、嚴げん寒かんの時時ときとと同おななじじこことと也なり。夫それ

ゆえに、うめははや、さくら、おそ、さく、なのはな、だんき、すこしづつ、
由ゑル、梅者早く櫻は遅く咲ならん。菜の花も、暖気の十二月より少しつゝ
ひらき、にがつころにいた、ゆきしも、ためになえしほみす、ちなみにいう、ぼうしゅうな
開き、二月頃尔至り、雪霜の為尔萎凋春るもあり。因尔云。房州奈ども、
ふゆ、そうしゆんだんき、て、ちゅうしゆんよ、さむ、由、みな、とうごくかいがんは、おなじごとく
冬より早春暖気に天、仲春与り寒くなるよし。皆、東国海岸ハ、同じ古とく
おもは
思ハる。(中略)

五、明治初期の鹿島のバブル、

よのなか、なにごと、いわう、明治十二年のあき、いわし、ぎよぎよう、きんしようなるゆ
世の中は何事も祝ふべきもの尔て、十二年能秋まで鰯の漁業、僅少奈る由
えたいりよう、いの、て、ひだり、じゅうはちりと、はかしまぐんかいがん、なんぼく、りていなり
ゑ大漁を祈り天。左の十八里とハ鹿島郡海岸、南北への里程也。

じゅうはちり、いわしにせまし、あきの、はま、と、こうせし、に、ほどなくしよしよづつ、りよう、
十八里、鰯狭し、秋の濱、と、口号せし、程無く少々つゝ、漁あり。

よくじゅうさんねんいちがつみつつか、たいりよう、よりなおお
翌十三年一月三日より大漁、十四年一月四日方猶多し。
めいじ(1881年)、かのとみ、より、かしまうら、いわし、たいりようかくあ、ひび
明治十四年、辛巳、一月四日与里、鹿島浦、鰯の大漁獲あり。八日まで日々
つづ、ひらいむらな、は、わずかよつかかんに、はちまんえんあまり、りよう、かくむらむら
續き、平井村奈どにて者、僅四日間尔、八万圓餘の漁ありと云。各村々も
みな、たいきん、え、ごじつ、きけば、ぐんちゅうかくむら、そうぎよぎよう、えきん、およそ
皆、大金を得たり。後日に聞介バ、郡中各村の惣漁業の得金は、凡、
ひやくまんえんなり、いう
百萬円也と云。
よ、またいわい
予、亦祝して、

わたつみの、(大海の)、ささぐるにえは(献る供物は)、よるなみの(寄せる波の)、
わまつみの、ささくる贄は、与流浪乃、たまのかずより(珠玉の滴より)、いおのさわなる(魚の大漁なる事)、
としごとに(年毎に)、あまのけむりの(漁師小屋の煙が)、たちそうは(多く立ち昇るのは)、
登しことに、海士の煙乃、うらのあみひきの(地引網を引いた)、さちにぞありける(大漁の海の幸)、
立そぶ者、佐ち尔そ阿り介る、

浦の網ひき農

佐ち尔そ阿り介る

か、かくむら、たいきんゆうずう、ゆえ、したがいて、じんぐう、さんけい、にん、きよた、さけみせたびみせな
斯く各村、大金融通よき故、随天、神宮へ参詣人も許多にて、酒店旅店奈
は、ちゅうや、ひき、ず、しゃくとりおんなども、とうきよう、そのた、くる、いっごに
どハ、昼夜となく引もきら須。酌取女共も東京、其他より来るもの、一戸尔、
しごめいずつ、おらぬはな、いちにちにいちめいに、きんごえん、な、しゅとく、いう
四五名宛、居らぬハ奈く、一日尔一名尔て、金五円奈らしの、取得ありと云。

去れば、夕よりは、絃音の絶間奈く、旅宿尔てハ、二階の新築家作の、建増
しするもあり、又、腕車奈ども、俄尔、三十輛も出来多り。水夫等ハ、翌朝
乃出船を、急く為め尔、深夜尔帰村春る者多く、僅可尔、一里も無き里程を、
車價に壹円遣し、釣ハ入らぬと天、断り加え車夫尔、酒食を与へて乗るも
阿り。或時は、五・六輛の車連ね天、大舟津村へ下り、潮来村へ早舟にて、
行くも阿り。爾後の事尔者注意世須、
金円を遣ひ捨ること、水の如
く也。

今回の事ハ、只、大漁而已奈ら須、三四年以来、諸作、萬、豊饒奈る
上尔膳貴にて、農家は各大金を得多るに任せ、驕奢贅沢尔天、無用の
翫弄物迄、買込人多く、其潤澤尔天、商戸も又益を得ること多し。
依て、宮中の商人者、勿論、東京、佐原奈どより数名の旅商人、諸国よ
りも、同じく数百名、一ヶ村尔四十名も落合ことありと入込むよし。
或商ハ、舶来物品持参尔て、浦方一巡廻尔て、金三百円を得多りと、予可、
邸尔来て直話也。
予可地借、
笹沼栄三郎明石屋奈どさへも、日々酒客絶間奈し。

六、江戸末期の鹿島の異変

「安政の大地震」

安政元年甲寅十一月四日、昼四時大震、后半時不ど過天、南尔當り、大風
の如き音聞え多り。是ハ鹿島洋中洪波発し、
下総飯岡辺より上総へ可け、九十九里海岸へ寄せ多りと云。
同日、南海より洪波発し、豆州下田港、又、紀州廣の港等へうち寄せ、人畜

しきよ はなはだおお
死去、甚多しと云。

安政 きのとう じゅうがつににち りくきたかせふきかんれい よる(十時) たいしん さくとらとし はなはだ
同二年乙卯十月二日、陸北風吹寒冷、夜四ツ時大震、昨寅年よりも甚しく、
近年尔覚無き震也。江戸中、甚し。

時尔則瓊、在府尔天、橋本町四丁目津久井屋新三郎方尔、旅宿奈里し可、
其辺ハ至て震弱く壁奈ども不落。失火も無し故耳、其辺の人々、鹿島大宮司様、
被為入候故、如斯奈りとて、甚、神威を賞し介ること也。

鹿島尔天ハ、齋垣内右ノ方、石燈籠式基倒レ、楼門正面大額、
此方夜半ニ而釣り糸切連、又御饌殿前、鉄の用心水の益乃水溢れ多り。燈火
由り消由る、不ど尔天ハ無し。

則文ハ、禁中御祈玉串、水戸へ進猷尔罷出、帰路、北浦の船中尔天、格別の
事なしと云。予ハ、直尔神宮へ参上、諸事指揮致ス。神宮ニ而ハ、判官岡見
伝盛、大長塚原直興、只二人のミ参上ス。

「鹿島と江戸の暴風雨」

(一八五五年) ひのえたつ にじゅう みる あめふり しょこう ころ(夜8時) たつみ(南東の風) つよ ふきだ
同三年丙辰八月廿五日、昼より雨降、初更の頃より巽の風強く、吹出

し、三更の頃 甚しく、南風尔奈り又西風も交り、鹿島山内乃、松、杉、
百二十七本折る。廳場ニ而ハ大杉、根方倒れ多り。神木乃大杉も大枝折れ、
又宝庫の棟へ杉折掛り破損あり。予可、臺所も棟を損じ、表座敷東側
の軒口を損ず。雨者早く止ミた連ども、風者長く吹荒多り。則文自身とよく
働き、座敷向雨戸を防御候故、破損少し。

村田弥大夫家も潰連多り。素立ニ而、家根のミ葺、未夕壁を不附由
へ奈り。宮中民屋も七軒、顛倒須。息栖ニ而も、新規家作中の家、四、
五軒倒たり。大舟津尔も倒家阿りと云。

同所、一ノ鳥居倒レ掛りたり。六十年來無覚、大暴風也と云々。
江戸ハ別而大荒。本所深川高輪辺、洪波深さ五六尺。内海の洪波ニ而、行徳
辺方上総迄、浦々同断ニ而、人家多く倒レ又流レ、人畜多く死亡す。

あたりよりかずさまで、うらうらどうだんにて、じんかおお、たおれまたながれ、じんちくおお、しほう

安政三年

同九月七日、予も出府奈し。八幡方行徳迄の田地へ洪波来り。荒跡見るるに、忍ハさ流有り様也。

「桜田門外の変」

万延元年庚申、三月三日大雪降る。寒氣厳し不順也。今日江戸桜田門外二、水戸浪士等、大老井伊掃部頭を殺害須。

「水戸浪士の鹿島来襲」

文久元年・万延二年辛酉二月廿八日改元、正月十三日。水戸藩士大高彦二郎、大津某等之附属共、藩士浪士等多人数なり。神宮廣前二而、狼藉、神楽太鼓を打破る。此時大高等ハ、御手洗阿りて不知之。後尔聞き恐縮して、中野仲之介と云ふ者をして、謝言有之。後年、根本寺に浪士共 屯集の濫觴なり。

「坂下門外の変」

同二年壬戌正月十五日、浪士等、老中安藤對馬守を、阪下門外二於て、刃傷尔及ぶ。

此時予ハ、幕府年頭の礼として在府、同日朝ハ、例年水戸家へ年始嘉儀、使者以て申述る故、家臣村田正一郎差出し、夫より大塚の松平大学頭へ、玉串進上として廻り候処、同人立歸りて、今日巳之刻頃、大塚邊尔て藩士躰のものあまた、者数多、凡百人余鎗を引提、草鞋又ハ足袋跣等にて、袴羽織、或袴のミ着、又着流し奈ズルて、甚周章の体に皆南方へ向て、奔走する由多、最寄に尋候処、大塚乃安藤殿下屋敷の藩士、上屋敷へ詰候。不審の由尔申候と申聞候。是より先、旅亭津久井屋新三郎、橋本町四丁目、の家代共

乃話尔て、此珍事承知せり。後日尔委しく聞ば、安藤ハ面部尔加春り疵一ヶ所、背後尔長サ二寸の疵、一ヶ所なりと。或ハ腰を切られ多りとも云。何連も浅疵の趣也。當日ハ、加籠尔天、阪下門内へ逃入たりと。其臣下も十六七人負傷あり。浪士も死傷

あり。又本日ハ、安藤登城の途中也と云。桜田以下浪士事件ハ、飛鳥川の記ル
委細誌あり。

「天狗党・根本寺屯集」

文久（一八六三年）みずのといじゅういちがつじゅうさんにち ころうと しものうこんぼんじ とんしゅう
同三年 癸亥十一月十三日より、浮浪徒、下生根本寺に屯集して、神領
および近郷越、騷擾須。是より前、潮来村小川村、其外、水戸領諸所ル屯集す。
よくがんにじ（一八六四年）さんがつにいた きんこう はちんせい またあきにいた なかぐんみなとおよ ほこたむら
翌元治元年 年三月尔至り、近郷ハ鎮静。又秋尔至り、那珂郡湊及び鉾田村、
鹿島・宮中など だつそう ふろうとししゆく ふゆにいた まった ちんせい いさいべつしにしる
宮中等へ、脱走の浮浪徒止宿。冬尔至り全く鎮静。委細別紙ル記す。

「江戸幕府崩壊の前兆」

ぶんききゅう（一八六二年）みずのえいぬ よる（十時）どきころ すうせい ほつぼうよりなんぼう ひこう
文久二年 壬戌七月十五日、夜四ツ時頃より数星、北方より里南方へ飛行す。
そのいろ しろき あかあおむらさきなど て だいしやうあ いくせんまん そのなか いたつ
其色、白黄赤青紫等に天、大小阿り。幾千万といふをしらず。其中に至て
ひく は じんか やねほど あるいはのきばほどともいう の所を飛ひ多り。何連も光り赫熒
低き者、人家の屋根程、或ハ軒端不ども云。の所を飛ひ多り。何連も光り赫熒
たり。又、暁尔も同しく飛多り。此時、大祝松岡時懋者、江戸尔
（赤く光る）また あかつきに おなじくとびた このとき おおほふりまつおかとときよしは（鹿島神宮神官）えどに
て見たり。諸人皆恐怖せしと。
あかつき ぶんは うえまつながみうじ さくらにて（千葉・佐倉）みた また ほんぐんほくこう ひとなにがし
暁の分ハ、植松永躬氏、佐倉尔天、見多りと。亦、本郡北郷の人某
とねがわ くだ せんちゅう どうじにみた よし
は、利根川の下り船中にて同時尔見多る由。
文久二年 つきみしやう かずさのくに くじゅうくり かいひん うばかい またほんがいのう おびただ
同年、月未詳。上総國、九十九里の海濱へ姥貝、又ポン貝共云、夥しく打寄せ
すうり あいだ つつみ きずきた じと いう さとびとはしよりように な また ひりように
られ数里の間、堤を築多る如しと云。里人ハ食料尔も奈し、亦、肥料尔も
せしと云。

むかし てんしやう年（千五百年代末） そうしゅう かいひんに（神奈川・相模灘）かい おお よせ ほどなく
昔、天正年中、相州の海濱尔、貝の多く寄たる事阿り。無程、
おだわらの ほうじやうめつぼうせし かば（文久二年の凶事） きやうちやうな さとびともいいしが
小田原乃、北条滅亡せ志可バ、此度も凶兆奈らんと里人共云ひし可、
いくほ（程）な とくがわしえど さり かずさかたがいむら いつきほうき またまた きゆうばくふ
幾不ども無く、徳川氏江戸を去り、上総片貝村に一撥蜂起し、亦々、舊幕府
しんなどだつそうし どうこく あねがさき（姉ヶ崎の戦い）そのたしよしよ おい せんそうあ
の臣等脱走志て、同国、姉ヶ崎、其他所々に於て戦争阿り。

えんしょ せつには おうらいにわずらわん はなはだ しかる せきじあるなつ とちをしらざるもうじんいちめい
炎暑の節ルハ、往来ル煩むこと甚し。然るに昔時或夏、土地不知盲人壱名、
このさばくにいき かり ほうい うしない こなたかなた いきまよい しゅうじつなんじゅう が かく
此砂漠ル行かゝ利、方位を失ひ、此方彼方と行迷ひ、終日難渋せしガ、斯
るたいしよゆえ おうらい ひとなか にや
累大暑故、往来の人無りしルや。

しょうさつき た にりようあし いため 之に加え しよきあた ありしが ついに いかだお
焦砂着、為め尔両足を痛め、加之、暑氣中りにても阿りしガ、終ル、行倒
れ死せしと云ふ。僅可一里ル、半里の砂漠奈ガら、おそる遍き事也。

九、明治期の鹿島の不況

明治十五年 しょうごく ぜんこくふゆうずう おもむきなるが ほんぐん (鹿島郡) ふゆうずう
十五年、諸国ともに全国不融通の趣奈るガ、本郡などの、不融通の
げんいんは だいいちは べいかげらく つき こめ あまた ちよちくのは たかねに ば
原因者、第一ハ、米價下落に付、米を阿ま多、貯蓄乃者ハ、高價ルならバ、
うりださんとて かこいおき ようい てばなさず それゆえに ふしん いるい いったいみあわせ
賣出左んと天、囲置き、容易に手放さ須。夫故ニ、普請も衣類も、一切見合
おり だいに は さくとういらい はまかたふりようつぎ いわしはもちろん しょうかな
居り。第二ハ、昨冬以来、濱方不漁継ぎ、鰯ハ勿論、諸魚とも。夫由多網持共
はじめ 漁業者いちどうこんなんなり だいさんは さくしゅうはたさく干ばつ損害 べつしてだいず は 半分も
初、漁者一同困難也。第三ハ、昨秋畑作干損。別して大豆などハ、半毛に
とりあがらず そのうえに 本月さんがつにいたり なたねあぶらおおいにねげらく だいやん ほんけんしもがもじんじや
取上ら須。其上耳、本三月ニ至り、菜種油大ル價下落。第四、本縣下鴨神社、
富くじきよかに 猛き欲深れんちゅう くじ かう ほんぐんちゅうにて (鹿島地域) まいつきさんぜんえんあまり
富許可ルなり、猛深連中、鬮を買もの本郡中に天、毎月三千圓余の
かけきん だす いう くじいちほん あたい きんろくじゅうせんづつなり だいがは しょうにんども さくねんじゅうこう
掛金を出須と云。鬮老本の價、金六拾錢宛也。第五ハ、商人共、昨年中高
かにて とんやむき しいれた ぶつびん おおかたねさげゆえ とうきようはじめしほうども ぶつびんげらく おおいに
價ル天、問屋向より仕入多る物品、大方直下ケ故、(東京初諸方共、物品下落) 大
ふつこうのみならず かいびとさらにな だいろくは かねかしぎよう しゃくようにんのみおおく りしさ
不都合のミなら須、買人更に無し。第六ハ、金貸業も借用人而已多く、利子さ
えはらうひとなく ゆえにしちとせいにんなどは べつしてなんじゅう おもむき
へ拂ふ人無く、故に質渡世人杯者、別して難渋の趣。
いじよう 六つ げんいんにて 農業、工業、商業共に こんなん はいうにかたるにのべがたし いわんや まずしきしぞくやから
以上、六の原因ル天、農工商共、困難ハ云語ル述難し。況や、貧士族輩
をや。但本郡而已なら須、縣下一統の窮迫也。乍去、米価の下落ル天、小民
ハ、少しく息をつく奈り。

十、江戸時代末期の鹿島・宮中村の出火、

ぶんきゆう(1863年) みずのとい じゆういちがつついたち よる五ツはんどき(夜9時) よがたくおくざしき
文久三年、癸亥、十一月朔日の、夜五半時頃、予可宅奥座敷、予可、
居十疊敷也。南の方欄間の壁へ妖火現る。形丸く志て、王多り、四寸程、
常の陽火乃如く赫熒たり。此時、燈消天暗夜也。予可妻ハ末女を抱き外し
ており、よはさいふにて、そばには、ようねん げじよ ひとりほかたり つまはひき
天居、予ハ在府尔天、側尔ハ、幼年の下女、一人外多里。妻ハ久しく見て居
りし可、不思議由へ下女越、呼起し多れども、驚怖し天、起出須故尔、別間尔
外多る、則文を呼起し其様を物語介れ者、則文ハ、次の間迄走り来る時、
ようか は たちま きえう てあと けらい(大宮司家、筆頭用人) だいじころ
妖火ハ、忽ち消失せ天跡もなし。家来 村 田 正一郎も、臺所より
走り来り介る可、廊下の辺尔天妖火を、チラリと見多りと云。其後更尔行衛
を知ら須。

十一月じゆうさんにち みとろうし ぞくにてんぐとう しよう ぼうとすうじゆうにん じんりょうなかしものう
同月十三日より、水戸浪士、俗尔天狗黨と称する、暴徒数十人、神領中、下生、
こんぼんじにとんしゆう きんそん そうどう のちに よおやこ たいなんにあい (二の騒動の件で、幕府より処罰を受ける)
根本寺尔屯集して、近村を騒動し、後尔、予父子、大難尔遇たる
きようちような

凶兆奈るべし。

けいおう(1866年) ひのえとら しちがつちゆうじゆん ひびきゆうちゆうにて みやしたへん すすめ せんそうあ
慶應二年、丙寅、七月中旬、日々宮中尔て、宮下邊、雀の戦争阿り。
そうほう カラスいっばづつ しようすい みえた すうじつに やむ めいじがねん(1868年) ほんごく
双方に烏耄羽宛、将帥の如く見え多り。数日尔して止ム。明治元年、本國
および総野近國尔、戦争阿る凶兆尔や。
およ そうやきんこくに せんそうあ きようちように

どう(慶應三年) ひのとう せいなんかせはげ ふく 夕方なつはんどきころ(夕方5時) なかまち
同三年、丁卯、二月十九日、西南風烈しく吹。夕七ツ半時頃、中町、
伊兵衛後家同居、某宅より出火。同町及び桜町五軒町、又構内笹沼栄三郎
等類焼す。此散火、予可宅の家根へ五ヶ所燃付き、稍く消止め多り。立原
つねたり しようぼう こんや かせきたにかわ あめふ ゆえ はやくちんか
常足よく消防せり。今夜、風北尔替り雨降る故、早く鎮火。

どう べいけんるいしよう にのとりい えんしようす これ さきじゆうがつみそかよる のりよし
同、十一月二日、五軒類焼。二ノ鳥居、炎焼須。古連、先十月晦日夜、則瓊
ぎみいんきょうらに きつねこん こん ふたこえなき またあとにき ばどうやには 大町に
君隠居後尔て、狐コンコンと二聲啼たり。又後尔聞けば同夜尔ハ、大甲尔て

も狐コンコンと啼たり。凶兆歟。二度共焚出し飯等施与す。

明治元年、戊辰、正月下旬より二月尔至り、鹿島宮中諸所、井の水

渴たり。予可邸乃井も掘らせ多り。諸方にてても大方ハ掘りたりと。是ハ今年、

霖雨の兆奈るべし。霖雨のことハ別尔記たり。

同 二月廿日、夕七ツ時、北方に當り天赤氣立、乾より、良尔渡り

、其色の如くに天、地上の物皆映ず。是ハ本年、奥羽二國の戦鬪

亦北海道 同断の凶兆奈るべし

同四年 辛未二月廿五日、南風吹夜、大町、北宿山中より出火。

大町、数軒類焼須。近年、稀奈る大火奈り。施與同上。

同年、十二月朔日、深夜桜町、中根某より出火、四軒類焼す。

同月、二十日夜、祭事殿、米盛和一郎亮道邸中、旧名祭當殿なり。及び護国院・普濟寺

等焼失。三ヶ所共、附火也。但、類焼者奈し。

同五年、壬申、二月四日、深夜、構内内田蔀宅焼失、附火也。類焼ハな

り。七軒類焼す。

明治十一年、戊寅、三月十七日、夜、桜町宮本作右衛門、物置より失火。附火奈

り。七軒類焼す。

明治十二年、己卯、十月廿七日、旧曆九月十二日、強雨、前十一時より雨静可

に奈る。正午より南風吹出、後一時強く吹、三時より雨止。此日、午前九十九

里海岸、暴風雨。俗尔、龍巻と云ふことアリ。大洋より暴風吹来りて、雷

の如く響き、電光ひらめきて、武射郡、蓮沼村尔て、七十軒倒連家アリ。

土蔵一棟崩れ、又、漁舟を巻上げ、但壹艘、遙可遠くへ落し、微塵尔奈りし

と。怪我人も阿また、ありしよし。

孝按尔、此竜巻と云ふハ、颶の烈しきもの奈るべし。此時予ハ富田邸、大高

氏尔止宿して、雷鳴の如き響き越聞たり。

同 十一月五日夜、小神野治行家焼亡。但付火也。同人ハ、茨城縣下、

かみいち すまいに くりばやし きゅうたくには る すいながしい が そのよはたしよにししゆく
上市に住居尔て、栗林の旧宅尔ハ、留守居某居たる可、其夜ハ他処ニ止宿
す おし ひでゆきあそん ぞう しようぼうす
春と。惜むべし秀行朝臣の像、焼亡須。